



灰の水曜日 (マタイ 6:1-6,16-18)

田平教会家族で、衣ではなく心を引き裂く

本来ならミサに参加できたであろう皆さん。灰の水曜日を、灰をかぶらずに迎えた年があったのでしょうか。御復活を、復活徹夜祭ミサをささげずに迎えた2年前を思い出しました。2年前、ただ一人で復活徹夜祭ミサをささげながら、「こんな御復活は二度と迎えたくない」と思ったのでした。

今日、皆さんと灰を頭にかぶる式をすることができず、一人でミサをささげながら、本当に悔しさでいっぱいです。しかし一つのことを考えが向かいました。健康に不安がなくて灰の水曜日のミサに参加できる人は、実は限られた人ということです。新型コロナの状態になるずっと以前から、灰の水曜日のミサに参加できなかった人はいたはずで

かなり前から灰の水曜日のミサに参加できず、灰の式を受けることができなかつた方々は、この日をどのように迎えていたのでしょうか。この日のミサの第一朗読で預言者ヨエルはこう言います。「主は言われる。『今こそ、心からわたしに立ち帰れ、断食し、泣き悲しんで。衣を裂くのではなく、お前たちの心を引き裂け。』」(ヨエル 2・12)すでに、灰の水曜日のミサに行きたくても行けないこと、灰の式を受けることができない寂しさなどで、「心を引き裂かれる思い」でこの日一日過ごしていたのだと思います。

ひょっとしたら、灰の水曜日のミサに参加している信者たち、ミサをささげている司祭たちは、「私たちは灰の水曜日のミサもささげているし、灰の式もちゃんと受けている」そんな「ほんの少し優越感を持って」ミサに与っていたのかも知れません。

「私たちは灰の式を受けた者だぞ」みたいな心がほんの少しでもあるなら、これを機会に私たちこそ「衣を裂くのではなく、お前たちの心を引き裂け」という言葉に耳を傾ける必要があります。灰を受ける儀式は立派でも、受けたくても受けられない人の気持ちに寄り添っていなかったかも知れないからです。

私たち田平教会家族は今年、「灰の水曜日のミサに参加したくてもできない」「灰の式を受けたくても受けられない」同じ目に遭っています。同じ境遇にならないと分からないことがあります。今こそ、「衣を裂くのではなく、お前たちの心を引き裂け」という預言の通り、悔い改める姿勢をもう一度見つめ直しましょう。

私がお祈りの礼拝祭儀に参加できている時、参加したくても参加できない人を一人思い出しましょう。その人の心を携えて、今参加できている祭儀に臨みましょう。この心がけが身についたら、来年の灰の水曜日は今まで以上に恵み深い日になるでしょう。それはそのまま、今まで以上に恵み深い御復活の祝いを迎えることに繋がっていくのです。